

お花の一斉調査、フラワーソン

2022/6/10 自然環境部 陸域担当チーム 見原 悠美

皆さんは「フラワーソン」という名前を聞いたことがあるでしょうか？「フラワー・ウォッチング・マラソン」の略称で、誰でも参加登録ができる市民イベントです。例年同じ時期に、参加者が自分たちが選んだエリアを一斉に歩き、お花が咲いている植物を記録します。

北海道では北海道フラワーソンという名前で、北海道新聞社と公益財団法人北海道新聞野生生物基金の主催の下、第1回の1997年から、5年おきに開催が続いています。北海道全域を950個のメッシュ（地区）に区切り、参加者は事前にどの地区でお花を記録するのか決めます。調査地区は複数でも、自分が住んでいない地区でもOKです。今年は、第6回北海道フラワーソンの開催年で、6月18日と19日に一斉調査が実施されます。調査結果は写真や感想と共に実行委員会に送信し、整理され次第、道新の紙面等に掲載されます。また、フラワーソンのウェブサイトからも、集計結果が簡単にみられるようになっています。^[1]

なお、フラワーソンは、お花の記録数を「競う」ことがねらいではありません。イベントの意義は色々ありますが、身近な植物に目を向ける機会となること、市民科学の重要性の再認識ができること、各地区や道内の生物多様性の評価、地域でのグループ活動促進などに、大きく貢献していると考えます。また、5年ごとの開花情報を比較することで、「年々開花が遅くなっている」、「この種はこの地域で見られなくなった」など、気候変動や開発等による環境変化を考えることにも役立ちます。さらに、フラワーソンはお花の調査時に見かけたマルハナバチ（セイヨウオオマルハナバチも含む）やチョウなどのポリネーター（花粉媒介者）も報告することになっています。彼ら彼女らの多様性と花の多様性は互いに影響し合っているこ

と、私たちの食糧となる農作物の生産の約75%は、これらポリネーターのはたらきに依存していること^[2]からも、この記録も重要な意義を持っています。

フラワーソンのような市民参加型の調査は一般に市民科学（citizen science）と呼ばれ、広範囲を大人数で一斉に行う大規模な調査を簡易的に実施でき、膨大なデータを収集できることが強みです。この市民科学の力は世界的に注目されていて、花やポリネーター、鳥の目撃情報を登録する各アプリが普及しはじめています。さらに、これらのアプリで集まった情報は行政機関や研究者に利用され、新たな知見を得るのに有効活用されています。



前回のフラワーソン参加の様子

当社でも第4回、第5回と参加を続けていて、今年第6回は、エコ森林の植物相調査を兼ねてイベントに参加します。エコ森林には、どんな花が、どのくらいの種類、咲いているのでしょうか。また、それはどのような意味を持っているのでしょうか。結果については、エコ森林通信に掲載予定ですので、引き続きご注目いただければと思います。

[1] “北海道フラワーソン”. 2022 北海道フラワーソン. <https://flowerthon.net/>.

[2] “UN officially adopts the SEEA-EA system as the new global standard of economic reporting”. Food and Agriculture Organization of the United Nation. <https://www.fao.org/pollination/en/>.